ボストーク湖の死闘

木下充矢

宇宙の七割は、未知の力で満たされている。それがなければ、この宇宙はとっくの昔に元の一点に縮退していただろう。かつて、アインシュタインが「生涯最大の過ち」と振り返った、宇宙が今の姿を持つためのつじつま合わせのために導入した「宇宙項」。それが、二十世紀の末に、思いがけない形で復活した。観測可能な「宇宙」は、光と物質を合わせても全宇宙のわずかに五パーセント。暗黒物質と呼ばれる、観測不可能ななにものか、が残り二十五パーセント。宇宙の加速膨張は、あとの七割を「何か」が支えていないと説明ができない。天文学者はそれを「ダークエネルギー」と呼んだ。

我々の認識している宇宙は、高次元宇宙の「切り口」なのかも知れない。それは、「そうとも考えられる」という検証不可能な仮説から、「検証できるかもしれない宇宙の真の姿」へと、今まさにその位置づけを変化させようとしていた。

『同期観測の準備は整った。あとはイベントを起こすだけだね』楽しみでならない、という口調で、太古から地球生命の進化に多大な影響を与えてきた地球外知性の、最後の生き残り二柱のうちのひとりが言った。名を、ファーストスター、と言う。

『簡単に言うな』アカツキ、という名前の、もう一柱の地球外知性が言った。『お前はいつでも見てるだけだ。こっちは命がけの荒事。割に合わん』キャビンの窓から極夜の雪原を見渡して、アカツキは不快げに触手を打ち振った。

『その荒事が性に合ってるんだろう？　現場に入ると言い張ったのは君だ』ファーストスターは愉快そうに言った。

『お前が動かんからだ！　もう少し体を動かさないと関節が錆び付くぞ』アカツキがむきになって言い返す。

『そろそろ着陸態勢に入ります。コンテナにお下がりください』アカツキ専属アテンダントのユマ・マッケンジー南極条約機構軍大尉が声をかけた。

『うむ』アカツキがゆらりとキャビンの特設バケットシートから上体を起こす。

『ありがとう。済まないが頑固親父を頼みます、大尉』ファーストスターが、ひょい、と細身の体を身軽に起こすと、随行するアテンダント、ムサ・サラマ少佐の先に立って、さっさと歩き出した。

『なあにが頑固親父だ。若僧が』次いでアカツキが、がっしりとした五本のたくましい足で歩き出す。

二柱の異形がロートダインの後部貨物区画に消えると、ユマは懐の古文書を取り出してページを繰った。もしもの時になすべきことはすっかり頭に入っていた。その代償も。異形たちが人類の存続に危険をもたらす局面が発生した場合は、手段を選ばず、ただちにそれを排除しなくてはならない。ユマは、自らの心を探った。必要な時に、躊躇なく切り札を打つ準備はできているか？　できている。いつでも。ユマは、ふっ、と息を吐くと、パッセンジャーシートに五点シートベルトで自らを固定した。

ヘリパッドの点滅する標識灯が見えた。地球上で最も寒い場所、南極大陸の南磁極にほど近いボストーク基地に向かって、ロートダインは降下を開始した。

（二〇二七年七月十八日　南極大陸　プリンセスエリザベスランド　ボストーク基地）

着陸態勢に入ったロートダインが、回転翼先端のチップジェットを青く光らせながら高度を落としてゆく。極夜をバックに、ジェットのプラズマアークが、ひと連なりのリングのように見える。青い光輪をいただいた、異形の天使。

ロートダインは、複合ヘリコプターに分類される航空機だ。一九五〇年代に英国で一機だけ試作され、ヘリコプターの垂直離着陸性能と航空機の速度・輸送力を兼ね備えると期待されたロートダインは、燃費の悪さと騒音問題（回転翼の先端に小振りのジェットエンジンを付けてブン回しているのだから当然だ）を解決できず、事業化に失敗して航空史から消えた。そのロートダインが、フェアリー社の技術資産を引き継いだアグスタ・ウェストランド社によって、実に半世紀あまりの時を経て蘇り、俺の目の前で着陸しようとしている。なんだか、悪い冗談を見ているようだ。

新世代ロートダインのアークジェット推進システムは、巧妙な音波干渉設計でかなり騒音を押さえていたが、それでも、ロートダイン特有の甲高い駆動音は隠しようがない。中型輸送機に匹敵する積載量を誇る、極地仕様のオレンジの機体は、大きさに似ず軽やかに、南極ボストーク基地のヘリパッドに降り立った。

「監察官のお出ましだ」ジェーンが、機体後部の開き始めた貨物ランプに向かって歩を進めながらいった。

「せいぜい、失礼がないようにしなくちゃな」俺も、なかば諦めの境地で答えた。

ボストーク基地は、南極に点在する観測拠点の例に漏れず、純粋に学術目的で運営されている。南極条約で定められた随時の査察は加盟各国政府の権利だが、その行使は非常に珍しい。まして、査察の主体が、南極条約加盟国の政府ではなくＳＣＡＲ（南極科学委員会）ときては、これはきわめつけに珍しい。考えつく理由は一つ。ボーリングによる地中湖汚染――コンタミネーションだ。

ボストーク基地は数多くの観測ミッションを抱えていたが、もっとも有名なそれは、「ボストーク湖の探査」だ。ボストーク基地にほど近い場所、実に四千メートル余りの氷床のさらに下に、液体の水をたたえた地中湖が地中レーダーで確認されたのが一九九〇年代。液体の水が氷の底に存在できる理由は、膨大な氷層の圧力とも地熱とも言われており、いまだに決着はついていない。その後、たゆまぬ努力で氷層のボーリングは続けられ、最初に「ボストーク湖」の湖水サンプルが得られたのが二〇一二年。しかし、その学術的成果は芳しいものではなかった。ボーリング機材の潤滑に使われた有機オイルで、貴重な湖水サンプルがひどく汚染されていたからだ。再度の失敗は許されない。湖水を汚染しない安全な掘削技術の確立に、俺たちは十五年を費やした。その成果が現れる時が、目前に迫っていた。

ロートダインは、長さ十メートル余り、幅と高さは三メートルほどの標準的なコンテナ一基とＳＣＡＲの監察官一名を下ろすと、すぐに離陸した。アムンゼン・スコット基地のアイスキューブ・ニュートリノ観測施設にも届け物があるらしい。ロートダインの機動力は通常のヘリとは桁違いだ。

「ＳＣＡＲのユマ・マッケンジーです。よろしく」赤い防寒服に身を包んだアジア系の小柄な女性が、右の拳を差し出す。俺は拳を差し出して彼女の華奢な右手と手袋を打ち合わせた。

「ボストーク基地の高田智史です。地中湖ボーリング計画の工学面の代表者を勤めています。こちらはジェーン・ヒース」

「古生物学ユニット、ジェーンです。ボストークにようこそ」明るい灰色の目にひとなつこい笑みをたたえて、ジェーンはユミとフィストバンプを交わした。

「早速ですが、コンテナの設営に協力をお願いします。重要機材なので移動は慎重を期する必要があります」

「話は聞いていますが……ボーリングの現場前に、仮設のシェルターを用意してあります。しかし、基地建屋本体では駄目なのですか？」

「事情がありまして。この機材は、どうしてもボーリングの現場前に据える必要があるんです」にっこり笑いながら、ユマは固い意志をちらりとのぞかせた。事情とやらを説明する気はないらしい。
「コンテナは履帯で自走できます。移動経路はプログラム済みなので、ボーリング現場に移動しましょう」
「雪上車で牽引しましょうか？」
「ありがとう。振動を嫌う機材なので、自走させたほうが安全なんです」
ユマは、ゆっくりと自走するコンテナを先導するように雪原に歩を進めた。その間、彼女はなにごとかをヘッドセットに小声でささやき続けていた。コンテナの中身に、語りかけるかのように。
コンテナをプレファブのシェルター内に設営し、持ち込んでいた発電機からの電源をコンテナに接続してしまうと、ユマはさっそく、ボストーク湖氷床掘削の現場視察を始めた。ボーリングやぐらの下で、ユマは掘削技術者と会話を始めた。
「湖水の採取は、順調にいけば十五時間後です」
「わかりました。ボーリングチップ先端のテレメトリをこちらに回していただけますか？」
「どうぞ、アクセスキーを送ります」

近接磁界通信で受け取ったキーを使って、ユマはボーリング先端部の温度・音響・電磁波計測値を端末に表示させた。

「順調ですね。では、また明日」ユマは、コンテナから短いタラップを引き出すと、扉を開いた。二重扉になっていて、コンテナの内部は見通せない。

「夕食はどうします？　運ばせましょうか？」ユマの背中に、俺は呼びかけた。

「ありがとう。食料は持ち込んであるので大丈夫です。セキュリティ上の事情でここを離れられないので」ユマはちらりと笑顔を浮かべると、コンテナの中に立ち去った。睡眠もコンテナの中で取るという。

「コンテナの中には、よほどの物があるんだろうね」ジェーンが、ぼそりといった。

「なんだか嫌な予感がする。私は、あんまり近づきになりたくないな」しかし、十時間後、ジェーンの願いはあえなく破られることになった。

（二〇二七年七月十九日　南極大陸　プリンセスエリザベスランド　ボストーク基地）

翌朝六時。ボーリング現場に詰めている俺の携帯端末が、基地隊長からの緊急コールを鳴らした。

「サトシ。科学モジュールの会議室に来てほしい。今すぐに」
「いま手が離せないんですが」
「掘削は中止だ。ＳＣＡＲ（南極科学委員会）から退去命令が出た」
「何だって？」
「生命汚染の恐れが判明した、とのことだ。二〇一二年の氷床コアから、オーストラリアのＢＳＬ４研究施設で未知の致死性細菌が分離された」
最悪の事態だ。作業員に掘削の停止とボーリング施設の封印を指示すると、極夜の星明かりの下、急ぎ足で俺は基地の科学モジュールに向かった。
会議室には古生物学者のジェーンをはじめ、気象、天文、医療、基地運営、の部門長がすでに集まっていた。
「諸君、すでに説明した通り、緊急事態が発生した。まず、ＳＣＡＲのマッケンジー主査から、最新状況を説明してもらおう」

隊長に代わって演壇に立ったユマは、会議室のスクリーンに、ＡＣＤＰ（オーストラリア疾病対策センター）の報告書を表示した。

「二〇一二年サンプルから、微量ながら、極めて危険な未知の細菌が検出されました。死亡率は九十パーセント以上、有効な治療法は見つかっていません」会議室にどよめきが走った。

「このようなタイミングでのお願いを、誠に申し訳なく思います。ＡＣＤＰは、ボストーク基地全人員の即時退去と基地全体の封鎖を勧告しています。ＳＣＡＲ（南極科学委員会）は、この勧告を受諾しました。幸い、まだボストーク基地の地表がこの細菌に汚染されている可能性は低いと考えられます。二〇一二年の氷床サンプルを汚染した潤滑オイルが、この細菌の活性を奪った可能性が高い、とのことです」

「ということは……極力清浄な状態で進めている今回のボーリングには、アウトブレイクの危険がある。そういうことですか？」

「はい」俺の質問に、ユマはきっぱりと答えた。「何百万年も前に地表から切り離された生態系で独自の進化を遂げた細菌に、今の我々は対抗する術がありません。少なくとも、治療法が見つかるまでは、アウトブレイクのリスクを極力下げる必要があります。どうか、ご協力をお願いしたい」

「そういうことだ。防疫の専門家チームが、基地建屋の安全性確保のためにロートダインでこちらに向かっている。入れ替わりで、我々はオーストラリア西部の検疫施設に直行。地底湖ボーリング以外の観測計画は、うまくいけば来季以降には再開できる可能性がある。今は安全を最優先で行動して欲しい」隊長が、話を引き取った。

「地底湖探査はどうなります？」ジェーンが鋭い声を上げた。「防疫のためにも、地底湖生態系の情報をもっと入手する必要があるのではありませんか？」

「基地の封鎖が先決です」ユマが答えた。「まず安全確保。地底湖探査を再開できるかどうか、は、その後の判断にならざるを得ない。どうかご理解いただきたい」腰を浮かせかけていたジェーンを、有無を言わせぬユマの口調が押し切った形で、会合は終わった。

退去の準備のために慌ただしく部門長たちが散った後の会議室に、ジェーンと俺、そして、ユマと隊長が残った。隊長が、俺たちの切り出そうとする話を察してか、ふっ、と、吐息をついた。

「当ててみよう。君たちは防疫チームと残留する、と言いたいのじゃないか？」

「ご名答です」ジェーンが、少しだけ目尻に笑みを浮かべて言った。「古生物チームの検査機器は精密器材です。部外者には扱いが難しい。壊されてはたまりません。それに、防疫対策にも有用です」

「掘削機材も、操作に慣れた者でないと安全性が確保できない。封印しようとして逆にアウトブレイクを引き起こしたらどうなります？」俺も、一歩も引かない勢いで言葉を継いだ。

「……いいでしょう」ユマが、両手を軽く上げて言った。「専門家の協力は正直助かります。ただし、私の指示には必ず従うこと。お受けいただけますか？」

「あなたも残るのですか？」隊長が、驚いた様子で言った。

「はい。感染症対策の実務経験がありますので」そうユマが応じた。

基地封鎖の指揮を取るユマの指揮系統に編入される形で、ジェーンと俺はボストーク基地への残留が決まった。

そこから先は、目の回る忙しさだった。担当チームメンバーの退去準備と並行して、残留を許されなかった気象チームと天文チームからの自動観測機器メンテナンスの引き継ぎ。医師からの臨時健康チェックと医薬品支給、バイオメトリ機器装着の指示。天文主任は特に強硬だった。

「気温が低くて空気が乾燥している今は、年間を通じて最高の観測日和。さんざん苦労して立ち上げたテラヘルツ電波望遠鏡を遊ばせるなんてあり得ない」分厚い運用マニュアルを俺に突きつけて、天文主任はまくし立てた。

「あなたが残ってくれてよかった。観測は遠隔操作で続けます。何か判らないことがあれば、いつでも連絡してください」そして、彼女は立ち去りぎわに鋭い視線を俺に放って、言った。「壊さないでくださいね。絶、対、に」

「判ります。最善を尽くしますよ」実際、彼女の気持ちはよく判った。俺だって掘削機材を素人に触られるのは御免だ。それを受け入れざるを得ない天文主任の心中は察するに余りある。

近隣の拠点からかき集めたロートダイン二機に分乗して、隊長を含めた越冬隊員十二名が立ち去り、入れ替わりで送り込まれた、どうやら軍属らしい防疫チーム六名と協力して、基地建屋と、特に新旧二ヶ所の氷床採掘リグの除染と封印を終えると、差し当たってやることはなくなる、はずだったのだが。自動観測機器の、どこが自動だ、とぼやきたくなるような繊細な要求に次から次へと応え、防疫班員を精密機器から追い払いつつ、基地に不慣れな彼らに越冬生活のコツを伝授などしているうちに、たちまち一週間が過ぎ去った。幸い、検疫所の越冬隊員には些細な体調不良の他には特に感染の兆候はなかった。

（二〇二七年七月二十六日　南極大陸　プリンセスエリザベスランド　ボストーク基地）

「どうも、怪しい」ジェーンが、基地食堂で、俺に向かってささやいた。

「連中、人は悪くないけれど、生物学の知識がなさすぎる。防疫専門家、というよりも、特殊部隊のたぐいじゃないの、あれは。体格からしても」

「まあ、そういうこともあり得るんじゃないか？　一般人は俺たち二人だけだし、ユマの指示で基地の除染ができればいいんだから、医療のプロである必要はない」

「それはそうだけれど。あと、掘削リグは除染済みだからもう用はない筈だよね」
「まあな」
「……昨夜、新しい方の掘削リグに明かりが見えた。何かやってるよ、連中」
「何だって！」端末を取り出して、テレメトリを確認した。シャットダウンした掘削装置はもちろん何も応答をよこさなかったが、掘削リグの室温が、わずかながら上昇している。その意味は一つしかない。あそこには、人がいる。封鎖したはずの、基地の中で最も感染の危険が高いはずの場所で。機材に最も詳しい俺に、何一つ連絡をよこすことなく。

ジェーンと相談して、結局、現場を押さえるしかない、という結論に達した。ユマと彼女の部下たちが隠している、何ごとかの現場を。宿泊棟から点検通路伝いにこっそりと抜け出すと、俺とジェーンは、深夜二時に、掘削リグに忍び足で向かった。
「裏の点検口から、中が覗けるはずだ」掘削リグの外壁沿いに、出入り口の反対側に回り込む。今日は明かりは漏れていないが、施設内部の気温は明らかに高い。中に、人がいる。

極夜屋外活動用の暗視ゴーグルを起動すると、何かが動いているのが見えた。俺たちの目を警戒してか、照明は消している。二人、いや、三人。そして、大人の倍以上の身長がある何かが、ゆらりと動いている。足が、……足のようなものが、五本？　それが、素手でボーリングパイプを無造作につかみ、採掘装置にセットしている。無理のない動作だ。それはいい。だけれど、クレーンなしでボーリングパイプをセットできるはずはない。少なくとも、人間には。

突然、視野が真っ白になった。強力な照明で照らされている。見付かった！

「何やってるんですか」ユマだった。部下二名を従えて。彼らは自動小銃をまっすぐ俺とジェーンに向けていた。

「同じ質問を返させてもらおう」両手を上げると、俺はユマに向かって言った。

「君らは軍人だな。越冬隊員を基地から追い払って、一番危険なはずの封印した採掘リグに入り込んで、何を企んでいる？　生命汚染の危険、は嘘なんだろう？」

部下たちが、ユマに目を向けた。

「……いいでしょう。少し、お話をさせていただきたい」

ジェーンと俺は、ボーリングやぐらの横の、彼女が持ち込んだコンテナに招き入れられた。
「二つ、選択肢を差し上げます。もし、協力していただけるのなら、この書類にサインをお願いしたい」丁重な、しかし断乎とした意志をにじませて、ユマは二枚のタブレットをさしだした。俺が所属しているMIT惑星地質学研究室のボスの署名がすでに入った、守秘義務誓約書が表示されている。ジェーンにも同様。
「業務内容の記載がありませんが……ボスとの連絡は？」
「残念ながら、それはできません。それに、ここに書いてある以上のことはハミルトン教授もご存じない。いま決めていただきたい。お受けいただけるか、断るか」
「もし、断ったら？」
「ただちにここから検疫所に直行していただくことになります」
「何だって？」
「緊急事態なのです。民間人の関与は最小限に留めたい」
つまり。ユマは民間人ではない。

「条件をよく読んで、決めてください。断っても、不利な扱いはしません。ただ、」ユマの黒い瞳が、まっすぐに俺と、そしてジェーンを見た。

「もし協力していただけるなら、多くの人命を危機から救える可能性が高まる。そう、私は考えます」

結局、ジェーンも俺も、ユマの申し出を受けることに決めた。破格の報酬は大きなリスクと裏表だ。賢い判断は明らかだ。しかし二人とも、それよりも好奇心が勝った。事実を知りたい、という。

タブレットにサインを記入し、生体認証を済ませると、画面全体がライムグリーンに光り、初めて見るレターヘッドの付いた文書が表示された。ＡＴＯ、南極条約機構。

「ジェーン、サトシ、ＡＴＯへようこそ」ユマが、俺たちに右手を差し出して言った。「地球防衛の最前線へ」

『もうよかろう』壁の端末から、低くこもった、不機嫌そうな声が聞こえた。『入るぞ』

「ひとつ忠告」ユマが、俺たちに向かってささやいた。「ご親族に、とても高齢の、ひどく気難しい方はおられますか？」

「大伯父がいますが。だいぶ難しい人で、孫娘以外に笑うのを見たことがない」

「私は曽祖母かな。飼い猫以外、誰にも心を許さない人だった」

「結構。では、その方たちの不機嫌を、心の中で百倍にしてみてください。あなた方が今から対面するのは、そんな存在です」

いったい何が言いたいんだ？　首を捻る間もなく、コンテナのスライドドアが開いた。そこには、ありえざる者がいた。

「なにこれ」ぽかんと口を開けてジェーンがいった。

『無知故の無礼は許そう。早く知恵を身に付けることだな』そこに現われたのは、直径一メートル、高さ二メートル半ほどの円柱だった。その上端には巨大なヒトデのようなものが乗っていて、声は、その中央から響いてくるようだった。円柱の下端は、逞しい五本の足のようなもので支えられ、重そうな胴体を思いがけない速さで、優雅、といってもいい動きで滑るように移動させた。「古のもの」あるいは「樽型人」として知られている地球外知性の、存命する二柱のうちのひとつ、「アカツキ」と呼ばれる存在との、初めての出会いだった。

『こたびの目的はダークエネルギー・コアの回収である。これぞ我が一族の悲願、今一度、星界への扉をひらく鍵。反逆者、そしてその背後で糸を引く名もなきやつばらに、今度こそ目に物見せてくれよう』時代がかった、しかしなかなか滑舌のよい英語で、老樽型人は朗々と語った。声だけを聞いていると、まるで舞台俳優のようだ。

「お言葉ですが」ユマが臆する様子もなく応じる。「強大な敵を侮るのは賢明な行為ではありません。率直に言って、正面から当たって勝てる相手ではない。ご承知の通り」ユマの強い視線を受けて、ヒトデ形の頭部がわずかに揺れる。

『いかにも。故に、策を用意した。ＡＴＯ主力を中米に差し向けて敵の動揺を誘い、隙を突いて一気に片を付ける。形勢不利なら躊躇なく退く』

「それは判っています。ただ、話がうますぎる、と申し上げています。予備調査でいきなりコアの固有振動を検出。釣られている、と考えるべきです」

『ならば問おう。このまま守勢に徹して、勝機をつかめると思うか？　この十万年で、これほどの好機はない。釣りならば』樽型人は、昂然と五芒星型の頭部を反らして言った。『竿ごと喰らうてくれるまで』

「あの。お話中に申し訳ないのですが」俺は、おずおずと言った。「あなたは……いったい何者なんですか？　映画の収録なら、よそでやっていただきたいのだが」

『フム、よかろう。ヒト型向けに線形要約するならば、この惑星は我らが一統が月をもたらして以来、四十億年に渡ってわが一族の所領、我こそはその当主。不逞なる逆賊のため、永きに渡って雌伏を余儀なくされたが、遂にそれを覆す好機が到来した。功を挙げれば褒美を取らせるゆえ、励むがよい』

「省略のし過ぎです」ユナが冷めた声で言った。「お二人への説明は私がやっておきます。そのあいだに現場の準備を進めてはいかがですか？」

『任せる。三十分で戻る故、それまでに手筈を整えよ』

「御意」

深々と頭を下げるユマ。その頭を、イカの足を二十倍に拡大したような触腕でさっと撫でると、樽型はススッと俺たちの横を通り過ぎ、タラップを降って採掘リグへと戻った。

「いったい何様ですか、アレは！」ジェーンが、怒りに頬を赤くして言った。

「あなた、あんな態度を受け入れているんですか？　なんですか、私たちはあいつの家来ですか？」

「それ以下でしょうね」ユマが、さらりと言った。「下等動物。それが正直なところだと思います。樽型人の知的能力と人類のそれの差は、ほぼヒトと猫の差に相当する、と、専門家は考えています」

「だからと言って！」なおも言いつのるジェーンを手で制して、ユマは言った。

「それに。樽型人の、文字通り身を挺した働きがなければ、人類はとっくに絶滅していました。一八五年の超新星爆発で。一八五九年のキャリントン・イベント太陽フレアで。一九六二年のキューバ危機で。二〇二〇年のパンデミックで。永きにわたって人類の肉体と精神をあらゆる手段で蝕んできた、名状しがたい存在と対峙できるものは、彼らを置いてほかにありません。人類は、彼らに借りがある。私はそう思っています」

「時間がありません。手短に、最低限のことをお伝えします」ユマは、コンテナの壁面に資料を映し出した。見慣れた、というか、俺自身が引いた、地中湖ボーリング計画の工程表だった。

「この地球では四億年前から、複数の地球外知性同士の闘争が繰り広げられています。私たち南極条約機構はその一派と協力関係を結んでいて、彼らがかつて保有していた機材の湖底からの回収が、膠着した今の状

況を打破できる、と判断しています。にわかには信じがたいと思いますが、どうか受け入れていただきたい」

「正気の沙汰ではないですね」

「確かに。なので、このことは一般には厳しく伏せなくてはなりません。なぜなら、私たちの敵は、不安や動揺を『食べる』からです。文字通りの意味で。――このまま、計画通りにボーリングを再開してください。ただし、開通の三十分前まで。そこで一旦、人員を後退させます」

「危険なのですね」ジェーンが言う。

「はい。以降の作業には物心両面のリスクが伴います。この現場には心理安定度が高い人員を厳選していますが、少しでも不確定要素を減らしたい。Tマイナス三十分からは、掘削現場は私たち三名と『アカツキ』だけで回します」

「私たちはニンジャでも禅の達人でもない。ただの研究者です。なのに、どうして私たちを？」ジェーンがいぶかしげに言った。

「これから私たちが直面する現象には、身体能力や精神的タフネスでは対抗できません。何というか……一種の頑強な日常性、『鈍さ』のような特性が必要なんです。あなた方はそれを持っている、そう『アカツキ』は言っています」

ジェーンと俺は顔を見合わせた。

ユマは、矢継ぎ早にその後の手順を説明した。壁面にボーリング機材の略図が表示される。

「まず、回収した地中湖の湖水サンプルを『アカツキ』が分析します。そこには、ダークエネルギーコア、と呼ばれる、彼らがかつて保有していた、真空から莫大なエネルギーを汲み出す装置へのアクセスコードとなる指標物質が含まれているはず。ボーリングのビットに仕込んであるナノマテリアルにアクセスコードと制御命令をプログラムし、湖水に放出する。それをコアが受け入れれば、データリンクがつながり、コアは自力で浮上を開始します」

「自力で？　四千メートルの氷層ですよ？」ジェーンが驚きの声を上げた。

「突き破って出てくるそうです。その程度は造作もないと、『アカツキ』は考えています」ユマは平然と言い放った。

「いったいどんな技術力ですか。四億年間メンテナンスなしで、コマンド一つで四キロの氷を突き破る。正気の沙汰とは思えない」俺も反問せずにはいられなかった。

「樽型人の種族が太陽系への入植に使った恒星間宇宙船の最後の一隻。そう『アカツキ』は考えています。二〇一二年のボーリングも、実のところはコア回収が目的でした」

「では、なぜその時に回収してしまわなかったんです？」

「妨害が入りました。樽型人を絶滅寸前まで追い詰めた宿敵。深淵に潜むもの。彼らに精神を侵された掘削技術者によって地下水が噴出し、掘削チームは危うく全滅するところでした。今回は、『アカツキ』が現場で精神侵蝕を食い止める手はずです。……ただ、先ほども『アカツキ』に話しましたが、これが敵対勢力の策略である可能性は少なくありません。もし策略だと判明したら、ありったけのカードを切って、」

「そして？」

「逃げるしかありません」

（二〇二七年七月二十七日　南極大陸　南極点　アムンゼン・スコット基地　アイス・キューブ・第二期拡張ニュートリノ観測施設）

『そういうわけで、民間人を二名リクルートしました。計画は予定通り進めます』ユマが言った。

「君らしくないな。気付いていたんだろう？　当然」地球外知性ファーストスターの専属アテンダント、ムサ・サラマ少佐が言った。

『もちろん。ただ、アカツキが二人に興味を持って、できればＡＴＯに引き入れたい、と』ユマがため息混じりに答えた。

「苦労するね、君も。まあ、こちらはこちらで色々と大変だけれど。ファーストスターがアイス・キューブの観測時間を寄越せ寄越せ、と言って聞かない。仕方がないから、研究計画の申請から時間枠調整まで、一式面倒を見る羽目になった。本番までは強権発動は控えたいからね」

『いっそ、アイス・キューブも封鎖してはいかがです？』

「それができれば苦労はないよ。アムンゼン・スコット基地は規模が大きすぎる。床屋まであるぞ、ここには」

『羨ましいですね。こちらは雪と氷ばかり』
「おっと、ファーストスターから呼び出しだ。アイス・キューブの現地視察をしたいから人払いをしろ、との仰せだ」
『こちらはもう、人払いの必要はありませんよ』心持ち自慢げにユマは言うと、通信を終えた。

（二〇二七年七月二十七日　南極大陸　プリンセスエリザベスランド　ボストーク基地）
作業再開だ。ユマの部下たち、そして、恐れ多くもアカツキその人の助力を受けて、俺は掘削を進めた。アカツキのアシストがあれば、クレーンを使う必要はほとんどないことが判明した。残り三〇分までは順調に進み、手はず通り、六名のＡＴＯ要員は雪上車でデイビス海沿岸のミールヌイ基地に向かって退去した。
これからが本番だ。
「ボストーク湖の地底湖ボーリングは『ライザー掘削方式』だ。二重のパイプを氷層に突き立てて、内側パイプの先に付いたドリルビットから出るスラッジを、外側パイプとの間の隙間で吸い上げて回収する」忙しく端末を操作しながら、俺は言った。

ストレスがかかると、妙に多弁になるタイプの人間がいる。俺のように。状態は良くない。非常にまずい。

「なるほど、削り屑を取り除きながらだから、掘削がはかどるんだね」ジェーンが、暢気な声で言った。

「分厚い氷層が圧力をかけているから、地底湖の水圧はかなり高い。ボストーク基地の過去の掘削でも、湖水が噴き出す事故があった。なので、この手の掘削では、必ずＢＯＰを使う」

「ボップ？」

「プローアウト・プリベンター（噴出防止装置）。大きな逆流防止弁と考えればまあ合ってる」ダメだ。三系統とも。

「で、その大きな弁が？」

「閉じない。ライザーの水圧が急上昇しているところにバルブの動作不良。まるで、何かがバルブを押さえているみたいだ」

俺は覚悟を決めた。長年の苦労が水の泡だが、やむを得ない。

「緊急閉塞を実行します。よろしいですね？」ユマと『アカツキ』に向き直って、言う。

「お願いします」ユマがうなずく。
スイッチを入れた。爆発ボルトが起爆し、短く足下を揺らす。
「……ダメだ。作動しているのに！」掘削パイプを外から爆薬で押しつぶしたはずなのに、筒内圧力が下がらない。まさか、パイプの内側から押し返しているのか？
「後退しましょう。ここは危険だ」ユマが促し、我々は、コンテナをあらかじめ移動しておいたサスツルギ（風紋）の陰に移動した。

「掘削リグのヘッドが破損しました。湖水が噴出します……何だあれは！」吹き上がった湖水のいただきから下に向かって放射状に、樹氷のような半透明の青白く光るメッシュが広がる。巨大なクリスマスツリーが、瞬く間に形成された。
「採掘リグの高さは約十メートル。倍はあるな」俺はひとりごちた。リグを見下ろす、細長い、蜘蛛の糸で形作られたような尖塔。
「やはり、喰われていたか」アカツキがかすれた声でつぶやく。

いくつもの光点が、円錐形の裾から上に向かって次々に移動するのが見えた。クリスマスの電飾のように。

「アンジュレーター作動を認む。フェイズB移行、全弾発射！」ユマの音声コマンドに応じ、周囲に設置した三十基のランチャーから、一斉にミサイルが放たれた。尖塔の頂点がまばゆい光を放つ。ミサイルを迎撃しているのだ。

「着弾ゼロ、核起爆なし。フェイズC移行」ユマは真上に向けて信号銃を発射した。ここから外部への音声・データ通信は、敵対勢力による情報侵食の危険がある。軌道上からの信号弾の直接観測で、極軌道衛星が自己判定で硬X線レーザーを照射する手筈だ。

「もうできることはありません。後退しましょう」ユマは俺たちに促した。

『見届けたい。お前たちは下がれ』アカツキが、五つの眼を尖塔に向けたまま言った。

「……どうする？」ジェーンが言った。

「衝撃波が来ます。塹壕に下がりましょう」ユマが俺たちを促した。

「アカツキは？」

「彼なら大丈夫です。行きましょう」ユマは言った。「……それに、どうせ言っても聞きません」
「装甲被覆。早すぎる」アカツキが、かすれた声で言った。「駄目だ。間に合わん」
「伏せて」ユマが、塹壕の床に俺とジェーンの頭を押し付けた。極夜をかき消す、強烈な光が、かたく閉じた目蓋を通して目に突き刺さる。一瞬遅れて、百の落雷が一度に落ちるような轟音が、続けざまに三度。そして、耳の痛くなるような静寂。
「……おかしい。五斉射でワンセットのはず」ユマが塹壕から身を起こした。ついで、ジェーンと俺。
「なんてこと」ジェーンが口を手で覆った。
何が起きたのかはすぐに判った。直上の空に、いくつもの光点が、花火のように散開するのが見えた。ポリウスⅡD戦略レーザー衛星、だったものの残骸。あの尖塔が撃ち落としたのだ。
ひどく不快な、腹に響く振動が響いた。奴は、飢えている。俺は直感した。
尖塔のいただきに形成されたターレットに黒い点が見えた。真円。まっすぐこちらを指向しているのだ。
「おい。……何をする気だ？」
ユマが、防寒服の懐から厳重に包装、いや封印されたパッケージを取り出した。

「カミカゼは好みませんが、他に手がありません。……彼を、頼みます」ユマは、短く目礼すると、封印を切り、詠唱を始めた。

「フォーマルハウトの星霊よ、古の盟約によりて汝に命ず。我が魂魄を糧として疾く我が怨敵を焼き滅ぼすべし。標的、前方二百五十。高エネルギー分子機械」

上空に巨大な渦巻きが出現した。呼応するように、樹氷の柱が一斉に梢を上に向ける。渦巻きの中央から、目、にしか見えない、しかしとてつもなく大きな何者かが覗いた。渦の中央から吹きおろす、強い硫黄臭を持った生暖かい熱風に、思わず目を背ける。

「即時全力照射五十マイクロ秒。n'gha-ghaa naf'l thagn! Ia! Cthu……」

ユマは詠唱を終えることができなかった。アカツキの触腕に口を塞がれて。触腕が、古文書をユマの手からもぎ取る。

『汝ごときの助力は受けぬ！』アカツキが巨大な目に向かって朗々と告げた。『取引は中止だ。立ち去れ！』目がゆっくりと閉じてゆく。渦は次第に薄くなり、やがて消えた。

「なんてことを！　いったい奴をどうするつもりですか！」ようやく触腕を振り解いたユマが、アカツキに詰問した。
『知れたこと。一対一の勝負だ。邪魔立ては許さぬ。ユマ、たとえお前であってもな』アカツキは言った。五芒星型の頭部の頂点にきらめく黒い視覚球。それがなぜか、「笑って」いるように見えた。
『それに、これは最終手段なのだろう？　私が邪魔になった時に、私を倒すための』
「……知っていたのですね」
『無論だ。そうやって手駒を使い捨てるＡＴＯ執行部のやり口には反吐が出るわ』アカツキは、無造作に古文書を俺に投げて寄越した。
『預ける。ユマには渡すなよ。死にたがりよるからな』
「御意」俺は、深々と頭を下げると、古文書を懐にしまった。
アカツキが尖塔をめがけて疾走した。早い。音速を越えている。衝撃波の尾を引いて、尖塔の放つ閃光を間一髪で見切り、急速に距離を詰めていく。

「直下に入った！」アカツキが採掘リグに取り付いた。ビーム攻撃の死角だ。ズウン、ズウン、と、重い振動が響く。

「何てこと。……素手で」アカツキが、触腕を振るって尖塔の幹に打撃を加えていく。わずかずつ、尖塔の結晶体にクラックが走る。尖塔の巨体を支える幹の一本が、カン、と、澄んだ音を立てて本体からむしり取られた。

採掘リグの全長を越える長さの、透き通った円柱を、アカツキは水平に構えた。騎士の槍のように。

アカツキが、円柱を構えて別の幹に突進した。一気に、円柱と幹の両方が砕け散る。本体から折り取られた二本目の幹を、尖塔の頂き目がけて、投げ槍のように投射する。尖塔のターレットが爆散し、一瞬遅れて、無数のカットグラスを石畳にぶちまけたような音が雪原に響き渡った。そこまでだった。尖塔の全体が、一気に、カードの家のように崩れ落ちた。

『長きに渡って、我が一族は貴様らを使役し、隷属させてきた』アカツキが、ゆっくりと尖塔の残骸を踏みしだき、採掘リグに向かって歩みを進めた。ユマとジェーン、それに俺も、その後に続く。

『我が一族は堕落した。貴様らはその寝首をかいて、我が一族をここまで追い詰めた。もはや我が一統は滅びを待つのみ。星界への門ももはや閉ざされた。貴様らも、もはや思い残すことはあるまい。よくやった。褒めてつかわそう』

『そうおもうか？』

突然、採掘リグの根元に散らばった破片が、ザッと音を立てて集まった。

「ダークエネルギー・コア！」

『ただではしなぬ。きさまらぜんいん、ここでしね！』

再生したターレットが閃光を放ち、周囲を薙ぎ払う。しかし、なぜか、俺たち三人は無事だった。ターレットと俺たちの間に、アカツキが立ち塞がっていた。

「どうして！　なぜ避けないの！」

『……これもまた一興。敵を侮るものは、その高慢によって滅びる』アカツキは、全身を焼き払われながら、ゆっくりと、ターレットに向かって歩みを進めた。

「アカツキ、逃げなさい！」

『……アレクサンドリアの時のようにか。邪馬台国の時のようにか。逃げれば我が身は永らえよう。小さなお前らを見殺しにして。そうやって、逃げて逃げて、挙句にこのざまだ。もう飽きた』

「人類はまだあなたを失うわけにはいかない！」

『……勝手な……ことを……言うな。死に場所……くらい……自分で決めさせろ！』言うと、アカツキはターレットを掴み上げ、地面に叩きつけた。

バンッ、と轟音が響き、今度こそ、ターレットは沈黙した。そして、全身を黒く炭化させたアカツキも、力尽きたようにその場に崩折れた。その体に幾つもの亀裂が走り、綿毛のようなものがいくつもいくつも、とめどなく噴き出して、周囲に降り積もっていった。

（二〇二七年八月三十日　オーストラリア　ヴィクトリア州ジロング市　連邦科学産業研究機構 疾病対策センター）

「考えていたんです。アカツキは、どうして私たちを見殺しにしなかったのか。彼らの知能は、成人のヒトの知能の約十万倍だと言われています。彼らからみれば私たちは遥かに小さな、すぐに死んでしまう、取る

に足らない存在のはず。なのにどうして、と」ユマが、ＡＣＤＰ（オーストラリア疾病対策センター）に仮設された検疫施設の窓から中庭の芝生を見渡して、言った。芝生の間の貯水池で、水鳥が互いに呼び交わしている。

「だから、じゃないでしょうか？」ジェーンが言った。

「なくならないもの、いつでも手に入るものは、欲しいとは思わない。消えてしまうもの、すぐに手からこぼれ落ちてしまうもの。だから欲しくなるんです。樽型人も、同じなのかも知れませんよ」

「そうかもな」俺は、水鳥を眺めながらつぶやいた。「人間だって、猫を助けようと火事場に飛び込んで、挙句に焼け死んだりする。知性って、そんなものなのかも知れないな」

『馬鹿にするな』背後から、のしのしと足音が響いた。『ただの気まぐれだ。ニンゲン風情と一緒にするな』

「お達者で安心しました」ムサ・サラマ少佐が深く一礼した。「しかし、……かわいいですな」

実際、かわいい、という概念がわらわらと手を繋いで跳ね回っているような光景だった。全身をガンマ線レーザーで灼かれたアカツキは、繁殖サイクルに入って、胞子を噴出したのだ。胞子の多くが孵化し、またたく間に、仔ガモそっくり（ただし、つぶらな目が５つある）の幼生体に成長した。

「一部のマツ化針葉樹には、山火事で実生を焼かれることでしか繁殖しない性質を持つものがある、と言いますが……あなたの種族もご同様だったとは。正直、予想外でした」

『我が一族は、生命の危機に際してのみ繁殖する性質を持っておった。それと、極度に頑丈な、容易なことでは危機になど陥ることのないこの体の組み合わせは、もともと、先細りの宿命を持っていたのかも知れぬ。お主らも、我らを弑せんと望むならば、名もなきやつばらを見習って一気にケリをつけることだな。さもないと、……面倒なことになるぞ』ふはははは、と不気味な笑い声を上げると、アカツキはまとわりついてくる幼生体を踏まないよう、極度に慎重に、池に向かって歩み去った。幼生体を池で遊ばせるのだ。

「……遠慮しておきますよ」ムサは苦笑しながら、アカツキの背に声を投げかけた。

「全く、可愛らしい幼生体が、いずれあんなごっつい成体に成り果てるかと思うと、何とも言えない気分になりますね」ユマが、肩をすくめた。

「孵化した樽型人幼生体には、名もなきものの高次元からの精神侵蝕を阻止する能力がある、と言います。名もなきものと我々のパワーバランスは大きく変化したと言えるでしょう。たった二柱で支えてきた世界を、百もの樽型人が守護しているのですから」ムサは、にっこりと笑った。

「ファーストスターはご健勝ですか？」俺は、ムサに尋ねた。
「ええ。ボストーク基地のダークエネルギーイベントをマルチメッセンジャー観測で精密記録できて、もうすっかり舞い上がっていますね。それにほら、彼、目立ちたがりだから。ＡＴＯを説き伏せて自分達の存在を公開できたものだから、アイス・キューブにお神輿を据えて、論文を書きまくっていますよ。実名で」
不定形生命体が垣間見せた「真空エネルギー抽出イベント」の、重力波・電磁波・ニュートリノ同期観測によって、失われたダークエネルギー技術の本質が解き明かされた。いまひとたび、天界への扉が開いたのだ。いずれ、真空エネルギーも利用可能になる。まあ、来世紀くらいには。俺がそれを見ることはないかも知れないが、アカツキやファーストスターは、きっと、宇宙に乗り出していく。俺たちの子孫とともに。それは、心安らぐことだった。
「それに、宇宙論検証探査機が、思いがけない成果をもたらしています。浅く、しかし広く、という特性を与えられた専用設計の宇宙望遠鏡。ユークリッドやＸＲＩＳＭが、宇宙の大局構造の、わずかな、しかし確かな変動を観測しています。真空エネルギー抽出イベントと同期して」

「それ、ちょっと変じゃないですか？　宇宙望遠鏡が受け取るのは、はるか過去に放たれた光や電磁波のはず。それが、つい一ヶ月前のイベントに同期するのはおかしい」ジェーンが、口をはさむ。

「確かに、彼方の星々が光を放ったのは何百万年、何十億年も前のことです。でも、それは、私たちの宇宙空間を、このDブレーン膜宇宙を伝わって、我々の元に届く。高次元宇宙には、光速の制約はない。少なくとも、別の膜宇宙経由での、光速を超えた重力波の伝搬は、禁止されてはいない。さて、真空エネルギー抽出イベントは、高次元宇宙との一種の相互作用、とみなすことができます。少なくともファーストスターの見解はそうです。つまり」

「真空エネルギー抽出が、……宇宙の大局構造を書き換えた？　即座に？」

「はい。そう考えないと、実験事実と辻褄が合わない。かの有名な、シャーロック・ホームズの台詞に習うならば、『不可能を全て排除すれば、最後に残ったものは、真実である。たとえ、どんなに信じ難いものであっても』」

ムサ・サラマは、腰を上げると、ゆっくりと伸びをした。

「さて。アムンゼン・スコット基地に戻ります。ファーストスターが暴走しすぎないように、ちょっとハミを噛ませないといけませんので」ニヤリと笑うと、ムサはＡＣＤＰを後にした。